

ウエスト BAMBOO の過去・現在・未来 ～ 第 300 号記念・チャーターメンバーと会長・ ブリテン委員長による座談会～

日 時：2005年1月9日(日) 午後2時～5時
場 所：森田恵三ワイズご自宅
参加者：(チャーターメンバー)
森田恵三・笹山信泰・高野忠男・鈴木 寛
(会長)立山隆一
(ブリテン委員長)河合久美子(鈴木 寛委員)
司 会：河合ブリテン委員長



司会(河合)：本日はお忙しい中、お集まりいただきありがとうございます。本日の座談会は、ウエストクラブブリテン「BAMBOO」が、2月号で第300号を迎えますことを記念しまして、「ウエスト BAMBOO の過去・現在・未来」というテーマを設定し、チャーターメンバーの皆様、会長、ブリテン委員長にて、25周年を迎える今期、改めてブリテンについて考えてみようという趣旨で開催させて頂きました。本日の進行の流れは、まず過去のブリテンを振り返り、次に現在のブリテンはどうであるかを考え、最後に今後のブリテン、あるいは今後のクラブはどうあるべきか、というところまで話を進めていければと考えています。

まず最初に、それぞれ、これまでブリテンとどのように関わってこられたかをお話いただければと思います。特にチャーターメンバーの皆様は、25年という長い間、様々な形で関わってこられたことと思いますので、そういうことも含めてお話しいただければと思います。

森田：300号ということで、大きな金字塔が建てられたことは大変喜ばしいことと思います。今まで100号、200号でも記念特集を組みました。ウエストが創刊号を、チャーター前に発行したということが、日本区では初めてであったというところから始まったと思います。ブリテンはあくまでも外向きと内向きの両面の顔を持っているので、間違いがあってはいけない。かつては、会長が入ったブリテン委員会であったので、この記事を書かせてもいいかどうかということまできちんとチェックしていました。とにかくブリテンに関しては、記録が正しいということでないかと間違ったことが歴史として残る。それだけを気にしてきたように思います。

笹山：ブリテンを担当して一番楽しかったのは、初めてワープロで作ったこと。うまく打てなくて、何度も努力して自分なりのブリテンができました。色々な人に原稿を頼むと誤字脱字はともかく、内容が支離滅裂とか色々あり、委員会で修正すると、「勝手に直すな」と怒られたこともあります。そ

んな苦労話もありましたが、300号とはたいしたものだと思います。

高野：創刊からの初代の委員長をしていました。「BAMBOO」という名前は、私自身の仕事が「竹」なので、この25年、自分の仕事とBAMBOOとが全くオーバーラップしています。ウエストクラブのブリテンはどこよりも最高であると思っています。

鈴木：入院したりしてクラブを長い間お休みしていますが、300号記念のブリテン委員会ということで出席させていただきました。今までブリテン委員会とは関わりが深かったです。200号記念号を作ったことを思い出します。

立山：ブリテンについては、記事を書いても、関わりは全然無かった。今日は皆さんの意見を聞かせてもらって、今後の参考としていきたいと思っています。

司会：ありがとうございます。それでは、チャーターメンバーの皆様にお尋ねしたいのですが、クラブの立ち上げよりも先行して発行されていたと聞いております「BAMBOO」の、創刊当時の思い出・苦労話などがあればお聞かせ下さい。

高野：創刊について、当時の森田恵三会長の想いがぱっと出た。ブリテンは記録であるが、「新聞」でもあるので、まずもってクラブの人に先に見せるべきだ、伝えるべきだ、という会長の強い指導力で発行がなされました。そして、「BAMBOO」という名前を考えた。クラブには竹の絵を描く人もおられたりして、皆で作ったものでした。そして委員長として何をすればよいかを考えた時、新聞だから見出しをつけようと思いました。そうすれば内容がよくわかる。創刊から協力してくれる人も沢山おられた。これがブリテンの始まりでした。

森田：ウエストが生まれるところにエネルギーがあった。パレスクラブが10周年を迎える3年前に、日本区大会のホストをしたことがパレスを強くしました。その時7代目の会長を引き受けたのが私でした。そこで初めてそれまで600人位であった日本区大会が、1000人近くなった。それまでは分科会などの勉強を主力にしていたのを、フェスティバルという形式で行ったので、とても燃えたわけですね。そのおかげで、パレスも人数が増えた。日本区大会のホストを引受けてもへたらく、成功した。そのエネルギーがあふれる中、60人中10人が手を挙げて、その勢いのまま、ウエストを作ったのです。長岡にYMCAができて地盤があったので、西山地域に限って活動しようということになりました。それで、1980年5月5日に向かって出発しました。そして、ブリテンに誌名があるほうが良いということで、西山地域の名産の竹の子にちなんでBAMBOOという名をつけました。ところが、BAMBOOのデザインを専門家に頼むのに、お金が無かったので、チャーターナイトまでに色々ファンドを行いました。10人全員がパレスの精神と勢いをウエストに持ち込んだのです。よそのクラブにはない誌名があり、チャーター前に発行したということが、ウエストBAMBOOの特色です。第1号は反響が大きく、5月にチャーターナイトをしたばかりなのに、翌月の6月の日本区大会でブリテン努力賞をもらい、更にハッスルして、翌年にはブリテン賞と最優秀クラブ賞まで受賞したのです。そういう意味で、ウエストのブリテンは誇ってよいと思うのです。

高野：この時、森田さんが46歳か7歳くらい、ウエストの平均年齢が37歳。そして人員が38人。私が43歳。とにかく若さがあった。

笹山：パワーで走り回っていたね。こういう世界が初めてだったので、楽しいし面白いし。多少なりとも人のためになるということだから、仕事より優先するようになった。

高野：苦労話というのは出てこないね。

森田：楽しいばかりだった。

笹山：経済的にもまだなんとなっていた。だから走り回っていたのだと思う。

森田：その当時から、プリテンに限らず、委員会はそれぞれの自宅でやっていた。委員会が済んでから、メネットさんも巻き込んで一杯飲んだり、手作りの料理を食べたり…。その後、奥さんが大変ということで、だんだん止めになってきた部分もあったけれども、でも、プリテン委員会をすると、情報が色々入るので面白かった。

鈴木：高槻のほうまで電車に乗って委員会に出掛けたり、最終電車になって帰ったり…。

森田：その後、プリテンを出すのに、ファンドなども燃えて、チャリティーバザーもやった。

高野：うちのクラブのプリテンは、結構力を入れていたから、クラブ会計の中でプリテン費用の占める割合が高かったね。

司会：ありがとうございます。では、皆さんにお尋ねしたいのですが、プリテンに関して印象に残ったこと、例えば、苦労した点や、印象に残った記事などがございましたらお願いしたいのですが。

鈴木：苦労に入るかどうかかわからないけれど、徹夜で委員会をやっていたことがあった。発行するのが期限に間に合わないで…。

森田：期限を守っていたからね。ウエストの25年の間には、途中で発行が遅くなることもあったけれど、最初の頃はきっちと期限を守ってやっていたからね。

高野：最初の役員会までとはじめに決めたからね。

森田：最近は第一役員会までに配ってくれているけれど、それを守るために欠席者にはいち早く送ってほしい。でも、苦労話は記憶にないね。案外楽しかった。

笹山：楽しかったことが印象に残るね。

高野：苦労したことは出てこないな。



立山：苦労も楽しみに変わっているんですね。

森田：メンバーにデザイナーがおられて、面白いアイデアを出してくれて、正月号で似顔絵を描いたりして、その頃は確かに楽しかったね。でも、本当に苦労話は出てこないな。

司会：今はメールで原稿をもらってすぐに編集ができますが、私が入会させて頂いた頃はファックスで原稿をもらって、それをワープロで打ち変えていましたね。でも、もっと前は、手書きの原稿で、写真を貼り付けておられたりとか、原稿を郵便でやり取りされていたりとかと聞き及んでいます。そういうお話はいかがでしたか？

森田：ページの行数や字数、そして、写真の大きさも勘定してやっていました。

高野：創刊の頃は手書きの原稿です。それを印刷屋に渡して、向こうで全部活字にしてもらって作るから高かったのです。委員長が印刷会社へ行ってもう一度校正を見直して、並べ替えたりしたので、毎月、それだけの時間がかかった。原稿も集めるだけでなく、それらをどこに配置するかまでやらないと印刷ができない。文字数を計算して、27文字の何行と計算してやったので、毎週、相当の時間を費やした。それから、写真を撮っても、色が悪いとかよく怒られたものです。でも、苦労ではない。その後、私から3代か4代くらいになって、やり方を変え、ワープロで打つまでやろう、ということになった。更に、現在ではメールで送るようになってきた。大きく改良された委員長に、酒井さん、寺井さん、中瀬さん、中原さんがおられます。

司会：初期の頃は、プリテン委員会にどのくらいの時間を費やしておられたのですか？

鈴木：月2回でした。

森田：確実に2回はあった。まず先に原稿を集めてチェック。そして、印刷屋に出して、あがってきたらまた委員会。校正しないといけないから。それから最終校正は委員長か副委員長が行うので、彼らは月3回くらい動いてくれていた。どの委員長の時でも原稿集めには苦労をしていました。

高野：1年間のプリテンのあり方は、パレスがまずひとつの基本パターンを作られていた。私はそれを基にウエストのプリテンはこうあるべきだという姿を作っていた。記録紙としてのプリテンでは、ウエストは優秀だったのではないのでしょうか？

森田：元々、プリテンに何を載せないといけないかは日本区で決められている。聖句とか予定とか出席率とか…。それらはうちでは全て網羅しているので問題はなく、まじめです。あとは編集の内容が問題。かつては色々表彰してもらいました。

司会：それでは、今度は読者としてみた場合、今までプリテンを読んでこられて、こういう記事が良かったとか、印象に残ったこととかはありますか？

立山：笹山さんが書かれた平安徳義会との関わりについての記事が印象に残っています。

森田：会長をやると皆文章がうまくなるね。最近は「意見記事」が少なくなっている中、今期中瀬さんの連載は良かった。ああいう意見を書ける人はなかなかいなかった。私もかつて「どっぶり論」を1年8ヶ月にわたって連載したことが

あったけれど、やはり、過去の歴史を知らないと他人には説明できないので、「温故知新」は重要だと思う。「故（ふる）きを温（たず）ねて新しきを知る。以て師と為すべし」の言葉の意味からも、記念誌を発行して、5年毎の歴史を留めることは重要だと思う。あと、プリテンでは、CSとかEMCとかIBCなどの、その時その時のまとまった特集記事を作ることはいいと思う。それから、今まで「意見記事」では、「ワイズに入って良かった」などの内容が特に新人さんなどに多かったけれど、時折、批判的なことを書く人もあった。それはそれでいいけれど、仮にそういうことを書く場合、辛辣に書くのと傷つけることがあるので、気を付けることが必要。かつて、批判記事を検閲せずに出したことがあって、注意されたことがあった。それ以後、記録をきちんとしようと言っているのはそういうこともあったからです。

立山：思いを書くのはいいけれど、それなりの載せ方もあると思うので注意が必要ですね。ウエストでも、今編集に携わっているのが委員長一人なので、目に見えないうちに出てしまうので、やはり何人かが目を通して最終的にこれでいい、というシステムを組んでおかないといけませんね。

森田：ゲラ刷りをせめて会長だけでも見るようにしないとね。

司会：ずっと前はそうしていましたが、近頃ではしなくなっていますね。ただ原稿が揃うのがいつもぎりぎりなので…。

森田：期限が守られないのが一番問題だな。

立山：僕はそれは反省します。（笑）

司会：やはり一人でやっていると、後から見ると誤字脱字が見つかったりします。

森田：誤字でも大した誤字でなければいいけど、全然意味の違うことになっていたりすると困るね。

笹山：皆で回して読んで確認すればいいのでは？

森田：プリテンに限らず、他の委員会でも、今、会長が出たり、副会長が出たり、三役の誰かが出たり、ということは守られていますか？

立山：今、委員会を開くという部分があるそかになっています。EMCなどは盛んに開かれています、単独で開かれているというのは少ないです。

高野：文章の文責は守らないといけないでしょうね。自分がどうしても出してくれ、というのと、これはクラブとしては無理だ、というやり取りは、以前はよくやったものだけれど。

立山：そこでその人達との話ができるんでしょうけど。どうしてそんな想いをしているのかという部分が。

森田：だからしゃべらないといけない。この頃、忘年会とか何やら食べることとか、楽しいことをやっているようだけれども、ゆっくりワイズにかかわる話ができる楽しさが欲しいね。

立山：このごろは手軽に集まって、どうしても飲み食いが入ってしまうと、ある程度話をしたら、そっちへどっと流れてしまう面がありますね。

森田：それは昔からそうだった。（笑）

立山：それはそれでいいとは思うのですけど。

笹山：このごろはアルコールと車の問題があるけど、昔はそんなのは無かったからね。

立山：でも僕としたら、今期、割といい雰囲気できていると思うのですけど。

森田：やっているね。物凄く楽しんでいるね。人も増えてきているし。

高野：これは必要なことです。集まって楽しくて、ということ。EMCがされていることはプラスになりますよ。クラブは良くなりますよ。

笹山：30人から40人になったら凄いやと思うけどな。20人から30人はしんどいと思うけど。

高野：皆、楽しいからクラブに行くのであって、嫌々だったら絶対辞めますよ。だから今はいいんじゃないかと私は思います。プリテンは、全く不満はない。記録としても残せているし、ただチェックをどのような形でしていくかが今後の問題ですね。

森田：プリテンの内容の中で、どこへ行った、何をしたというのを誰かに頼んで書いてもらうというのが多いでしょう。記録的には大切なことだけど、たまには何か特集、例えばEMCについてなどを2~3人に書いてもらうとか。メンバースピーチを多用して、メインスピーカーとしてゆっくり話をしてもらったり、意見を持っている人に考えていることをじっくり話してもらったりする例会だと、プリテンの中身が少し変化すると思う。例会の中身がないとどうしても短い文が載るだけになってしまう。だから、できればテーマを持った例会もよいと思う。それから、クラブのメンバーやファミリーを知るために、メンバー紹介をシリーズでやってみたらよいのでは？30人の家庭訪問をしてインタビューなどもやってみたらいいと思う。昔は、家庭で委員会をやると、奥さんのこともメンバーに知ってもらえるし、話しているうちに、横で聞いていて、ああそんなことかとかわかってもらえる。他のクラブのプリテンでもよくやっているけれど、うちも長いことやっていないから、一度最初からシリーズでやってみたらいいのでは？

司会：今期はあと4回しか発行がないので、やるとしたら次期が始まる前に企画することが必要ですね。

森田：一期12回だから、3年がかりになるね。

高野：プリテンの中に、読んでみたい、というのがどこかに一つ欲しい。記録誌だから結果の話が中心なのは分かるけれど、続きは何か？というのがあれば毎月期待できるしね。

笹山：BAMBOO 創刊当初は全部一人ひとりについて書いたものでした。

森田：やったことがあったね。全部回らないうちに終わったりするので、3年続けてやろうかというのが必要だね。もし、スペースがないようであれば、最後のYMCAニュースをもっと減らしたらよい。別途YMCAからもニュース配信があるのだから。

高野：一定の枠内だけ、と決めてもいいと思う。

森田：プリテンに載せるべきことは、西日本区大会やクラブの表彰、出席一覧表、昔は切手やじゃがいもの記録まで載せていたけれど、環境のCO2TAXでも終わったあと全員の結果を載せることも必要だね。

司会: ありがとうございます。今までのお話と重複しますが、ブリテンの記録性という役割から考えた、ブリテン編集で留意すべき点は何か、ということをお話し下さい。

森田: 記録なのでまちがいがいいこと、批判記事には注意すること、それを防ぐために校正の段階で発行責任者となる会長や然るべき人にチェックを受けること。さっき言ったようにYMCAの記事の検討、ファミリーの紹介などがあってよいと思う。それから、オピニオンの読み物がうちには乏しいのではないかと思います。

司会: 今期、会則で出席率表を前半・後半と2回載せると明記されましたが、ブリテンで前半分が漏れていました。1年分まとめて7月号で載せるのですが、それでは会則と合いません。

森田: なぜ出席率表を載せるのか、というと、ワイズメンとしての大切な義務である出席率を高めるためです。最近見ていると、90%切れる月があるけれど、以前は、90%を切れるとメーキャップを勤めて厳しく言ったものでした。出席率表は、メンバーがそれを見て自分の出欠状況を確認して自己啓発するためのものです。だから、遅れても載せたらいいのではないですか。

司会: ありがとうございます。それでは、現在のブリテンでご意見・ご感想があればお願いいたします。

森田: 今のブリテンの内容は、高野さんも言っておられるように、うまくいっているのではないですか。

笹山: よそに比べてもいいのではないですか。

司会: 特に今期前半の中瀬ワイズの記事などは、広く読んで頂いたみたいです。

高野: 昔は日本区は日本全国だったから、「この記事面白かった」というのが会長さん宛によく来たものだった。それをまたブリテンに掲載したものです。中瀬さんの件でメールが来ていると聞きましたが、それはいいことですね。

森田: 意見というのはなかなか書きにくいことだと思うけれど、将来のクラブのことも関係してくるので、そういう意見的な記事も載せていきましょう。

笹山: 一番反響が大きかったのは、やっぱり森田さんの「どっぴり論」ではなかったですか？

森田: いまだに色々なところで使っているけれどもね。

立山: やはりシリーズ物でいくのがいいでしょうね。例えば、環境のウエストだから、今期、環境について皆に書いてもらおうという話もありましたね。

司会: そうですね。ページ数が限られているので、秋など行事が多いのでなかなかスペース的に難しかったのですが、後半に枠があればまた考えてみたいと思います。

それでは、これからのブリテンはどうあるべきか、という問題で、内容とか委員会の持ち方とかでお話がありましたらお願いいたします。

高野: まず、時代がどんどん変わってきているので、温故知新は必要だから、最初からのルーツを知ってもらうことは大切だと思う。それと同時に、時代に合ったブリテンであることも必要だと思う。我々が40代の時、最先端を進んでいたと自負している。けれども、その時代がずっと続いているか

というと、そうではなく、4半世紀過ぎた今、一番活性化しておられる若い人達を中心となって、まとめていかれたらいいのでは？

立山: 京都部でもIT化ということでよく話もされていますが、ただ、インターネット上のブリテンでは、見る人と見ない人がどうしても出てきてしまう。ブリテンというのは、やはり、紙で来るものと、自分から飛び込んで見るというのは自ずと違う。ポツと置いてあると、奥さんでもこれ何かな、という感じで見るけれど、インターネットだと、奥さん自体がわざわざパソコン開いてまでは見ることはあまりない。うちのクラブでもインターネット上でもブリテンが開けるけれど、僕は部数が少なくなっても紙で残すべきものと違うかなという気はしています。ただ、編集する作業自体は、一人でもスピーディーにできるようになったので、それはとても進歩していると思います。あとは書面で最低でも何部かは残していくという方向でいけばいいかなと思います。



司会: 今お話にでましたインターネットへの移行問題ですけど、今、ネットのみというクラブも結構増えていると聞いています。そして、ウエストでも環境への配慮の観点から、紙も全くなってしまうらどうか、という意見もあり、かつ、今会長がおっしゃった、紙があるからこそ読むという話もあって、ウエストでも意見が分かれている状況です。今期については、発送先を絞るということで、従来の400部から、300部に部数を減らしました。ブリテンの記録性という意味や歴史の継承、という意味からも、インターネットではずっと残っていくものではないということで、これは若手の他のメンバーからも広く意見を聞かないといけませんけれども、今後どうしていくかにつきどのようにお考えですか？

高野: 紙面上の内容と部数は減らして、インターネット上では沢山の情報を提供したらよいのでは？それこそ世界中の人が読めるのだから、大きく時代によって変えていって、詳しくはネットを見てくれ、というのでいいのでは？それを月々発信できると、まるっきり違った人が読んでくれる。

森田: それではずっとホームページを残しておかないといかなくなりますね。

立山: 部数についての検討は要るけれど、欲しい人に送るとか、資料で残していく分には紙で出して残していくことは必要だと思います。

森田: インターネットの件はそれでいいけれど、編集については、委員会を現実にもてないのだから、会長承認を経てから発行することにしましょうか。

立山：そのためには期日までに原稿を仕上げることでですね。

森田：永遠の課題ですね。

司会：最後に、これからのクラブはどうあるべきかなど、何かご意見がありましたらお願いします。

森田：もう一度原則に戻って、親睦と研鑽。親睦から生まれるエネルギーを奉仕に向けていくことがワイズメンの基本姿勢です。親睦によって培うのは自分の自己研鑽。自己研鑽する中で、自分が成長して、ワイズがいいなあと思って頂ける。そういう風になってもらうためには、まず楽しさを動機にするのはいいけれど、あと学びというもう一つのフォローが必要だと思う。

笹山：ウエストが発展してきたのは、森田さんという強力なリーダーシップを持った人の存在があったから。悲しいことに、加藤さんや中瀬さんというトップリーダーが欠けてしまった。次のリーダーとなるべき人を育てないといけない。善良な真摯で良心的なリーダーを育てないといけない。森田さん以外にオリエンテーションのできる人が必要。

高野：人にものを教えるには、自分が数十倍勉強していないと教えられない。ウエストの中から人選した方に研鑽すべきシナリオを提示する必要がある。

笹山：加藤さんと中瀬さんを失ったのは、中心人物を失ったことだと思っている。そういう人を育てるのも EMC の一つ。

森田：皆がリーダーになることが必要。ワイズメンというのは社会のリーダーでありたいので、皆がそういう気持ちを持たないと。特定の人だけというのではなく、全体がレベルアップした中で、さらにリーダーが出てきて欲しい。皆が勉強して欲しい。

鈴木：今日の雰囲気は楽しかったです。

立山：大先輩のお話を聞いて、色々勉強させて頂きました。今期は割とバランスがとれてきたなと思っています。年齢層が広がってきたのと、若いメンバーはやはりエネルギーを持っているので、その辺を上手にそういう方向に向けていくのが必要になってくるかなと思います。クラブでもどうやってバランスをとっていかかが大切だと思うし、その為に人も入れていく。今月、2名入会して29名、あと30名まで一人。何とか30名を越えて、次期に渡して、30周年には40名ないし50名になるようにしたい。今、良い感じに動いているので、それをうまく引き上げていくことが必要だと思う。

森田：今、ウエストでも一番若い人と40歳の差がある。もの考え方も当然変わってくる。けれど、今のバランス感覚というのは年をとった者も若い者もいる中でとっていかないといけないので、舵取りは非常に難しい。僕らの若い時分スタートした時はエネルギーがあれば良かった。40年の差がある中で、どれがスタンダードであるかを決めるのは難しい。若い人は若い人なりの理解でワイズを考える、経験を積んだ人にはそれなりの考え方がある。今は、老若男女お互いに気配りがあって、とても楽しく活発にやっているのではいいのでしょうか。

司会：本日は長時間にわたりありがとうございました。特に森田さんには場所の件など、お世話になりまして感謝いたします。大変貴重なお話をお聞きできまして、ブリテンだけではなく、今後のクラブ活動全般に関しても大いに参考となることと思います。ありがとうございました。



ウエストクラブブリテン委員会 歴代委員長 & (西)日本区表彰歴

年度	委員長名	表彰名
1979	高野 忠 男	ブリテン努力賞
1980	高野 忠 男	ブリテン賞
1981	安光 正 寿	
1982	鈴木 寛	
1983	川戸 徳 郎	ブリテン努力賞
1984	一澤 宗 弘	
1985	有澤 泰 伸	
1986	伊東 克 久	ブリテン努力賞
1987	河辺 利 晴	
1988	酒井 清 隆	
1989	大入 達 男	ブリテン優秀賞
1990	米谷 勝 功	
1991	川戸 徳 郎	ブリテン優秀賞
1992	安光 正 寿	
1993	山田 基 雄	
1994	一澤 宗 弘	
1995	伊東 正 文	
1996	中村 豊	
1997	高野 忠 男	ブリテン努力賞
1998	寺井 幸 生	
1999	河合 久美子	
2000	中瀬 康 平	(ホームページ開設賞)
2001	中原 一 晃	ブリテン優秀クラブ賞
2002	藤居 一 彦	(最優秀ホームページ賞)
2003	安平 知 史	優秀ブリテン賞
2004	河合 久美子	

ブリテン委員会では、記事を募集しています！

今期の発行もあと4回となりましたが、
「こんな載せたらいいのと違う？」
「こんなことがあったよ！」
「ワイズメンとして意見を述べたい！！」
というお話がありましたら、ブリテン委員会までご一報下さい。原稿以外に、写真やイラストでも何でも結構です。メネット・コメントからの投稿も大歓迎です。
ブリテン委員長まで E-mail kawai@kyoto-west.com
FAX (075)417-0922